我が弟子が最も強くてカワイイのである

赤石赫々

ファンタジア文庫

2934

口絵・本文イラスト　夜ノみつき

第一話　伝説の魔術師と奴隷の少女

ただただ、退屈だった。

魔術を究める究極の魔術師、星辰の支配者、三界戦争の英雄。シンプルなものだと、神というものもあったか。

これらは全て、様々な時代の誰かが私を呼んだ名前である。

魔術を用いて不老不死となり幾星霜。その最中に自らの力試しとして、それは色々な事をした。

時には荒れた大地を緑溢れる地に変え、時には邪竜と恐れられる巨大な魔物を倒し、時には宝物を収めた無限の塔を打ち建てた。

私のしてきた事を人の尺度に合わせて考えれば、この大仰な異名の数々も、さほど行き過ぎているわけでもないのだろう。

だが私の本当の名が老いて逝く人々と共に忘れられていった事と同じく、千の名前も大した意味を持たない。

邪竜を倒しても、魔王と呼ばれるものを封印しても、星さえ操ってみせても、なんと無

意味なことか。

私はそれを今、痛感させられている。それも、たった一人の弟子の手によって。

「テオさん、出来ました！」

私の目の前で、まだ十五歳の少女が、幼さを残した顔で朗らかに笑う。

翳した手には高密度の魔力を球状に安定させた魔術が生成されていた。

おそらく、それなりに下地のある魔術師が数年を修練に費やしても、これほどの魔力をこうまで安定させることは難しいだろう。

成功した魔術を見せたくて、私に褒められる事を予感して天真爛漫に笑みを浮かべるこの少女こそが、私が千と数百年の人生で取ったただ一人の弟子だった。

ああ、なんと恐ろしいことだろうか、我が弟子アリエッタ＝ペルティア。

そこらの魔術師が見たらすくみ上がるような魔術を手に、幼く笑う少女。

私はこの少女が恐ろしい。

「よく出来たなアリエッタ。努力の賜物だ」

「……！　はいっ！　ありがとうございます、テオさん！」

ああ、なんと。

我が弟子のなんと可愛らしいことか――！

千年以上の人生で最大の衝撃、最高の危機。

気まぐれに取った弟子があまりにも愛くるしすぎた。

修練の成果を試す際に外界へと降りる以外に人と接することをせず、たまに降りても自分のことに集中し、ロクに会話をしてこなかったせいだろう。自分を慕い、褒められようと必死に修練に打ち込む姿は可愛らしくて仕方がない。

大した才能もない普通の少女が、私に認められたい一心で次々と高度な魔術を覚えていくそのさまは、万能ゆえの退屈でくすんでいた私の脳髄に虹色の電撃を走らせる。

高度とは言っても、私からすれば児戯のようなものだが、アリエッタにはまだ少し難しい。それをなんとか上手い具合に教えようという試みそのものが刺激的だったし、一つ覚えるたびに嬉しそうに笑うアリエッタを見ていると私まで嬉しくなってきてしまう。

まずい。これは本当にまずかった。

千の異名も、それに連なる偉業もこの少女の前では何一つ役に立たない。

それらを誇ったことはないが、ある程度は自分を語られる存在の通りと思っていたのもまた事実。

弟子が一喜一憂を見せる都度、私までも笑ったり気分を落としてしまうというのは、なんとも情けないことで数年前の私が見たら何と言うだろう。

「テオさん？　なにか、考え事をしていらっしゃるのですか？」
「……気にするな。それよりも、反復を続けろ。感覚を掴んでいるうちに確かなものにするといい」
自分自身に対するイメージと、弟子への愛情のせめぎあい。どうやらそれが顔に出ていたらしい。
誤魔化すような私の言いつけにも、アリエッタは快く返事をして、言われた通りに修練を再開する。
本当に、素直で良い子だ。『師ではない』私の言葉も、それが上達のためだと言うのならばすんなりと受け入れる度量もよい。
こういったところが師としての親心のようなものを擽るのだ。このせいで、ついつい指導にも力が入ってしまう。
――魔術で姿を変えて弟子の通う学校に潜入などしてしまうくらいには。
姿を変えるとは言っても若返っているだけなのだが、通常人間が若返ることはない。変装にはこれで十分だろう。
名実ともに最大最高の魔術師である私が学校に通うなど、いくら若い姿でいても冗談甚だしいのだが――

「大方コツは掴んだようだな。今日はそのあたりにしておくと良い。魔力の使いすぎは翌日に響く」
「わかりました。ありがとうございます、テオさん！」
しかしそれも、普段見ないアリエッタの一面を見られることに比べるとどうでも良くなってしまう。
彼女は私のことを『先生』と呼ぶが、今の私は魔術学校の学生テオドール＝フラム。友に向けた『テオさん』という愛称は、この学校という場所ならではのものだ。
この新鮮さがたまらなくよい。千と数百年、魔術の研鑽のみに打ち込んできた私にとって、愛称で呼ばれるという経験はごく貴重なものだった。
魔術を究めるべく歩みを続けた数百年。初めは楽しかったが、すぐにやることはなくなった。
それからの千年以上は退屈で仕方のない時間を過ごしていたのだが――最近は、毎日が新しい刺激だらけで楽しくて仕方がない。
それというのも全てこのアリエッタという少女を弟子に取ったところからだ。
もしもあの時、気まぐれに弟子を取ろうと思わなかったら、どうなっていたことか。
ふと、視線を遠いところへとやり、私は過去を回想した――

ただただ、退屈だった。無機質な部屋にて息を吐く。
魔術を究める事を志したのは、いつ頃の話だったか。
目標としていた魔術の極みとやらにはとっくに到達し、既に千年以上が経過しようとしている。
まだ魔術を究める前の私ならばきっと魔の道に終わりはないと、今の私の言葉を笑ったろう。
だが今の私にとっては不老不死も、死者の蘇生も、星の創生も、次元の破壊さえも――思い付く限りのことは、全てが容易い些事に過ぎない。
思う限りの事を思うがままに行える。それが今の私が到達した魔術の極みという境地であった。
だからこそ、この世は退屈であった。
望むことを望むがままにできる世界というのは、読み古した本に等しい。
興が乗って本を読み返すことで新しい発見をする段階はとうに過ぎ、私がこの世界で何かを起こす、ということはこうすればこうなるという事象の再確認に過ぎないことだった。

◆

最初のうちは研鑽した魔術を扱うことに愉悦を感じ、世界各地で様々な実験を行ったが、今ではもう結果が見えていることをしようとは思わない。
また一つ、ため息が漏れた。
何かわずかでも愉快なことがあれば、この苦痛を一時でも忘れられるものを。
魔術というのは、私が考えているよりもずっと深いものだと思っていたというのにこれでは――不老不死の法など施さねばよかった。
その気になれば『不老不死を殺す』ことも可能ではある。だがそれもまた結果がわかっていることの確認に過ぎない。それを行うには――まだ何かこの世界には面白いことの一つでもあるのではないかと、希望を捨てられずにいる。
ああせめて、僅かなりともやり甲斐のあることでも見つからないだろうか。
まったく、困難を感じられる者が羨ましい――と。
そこまで考えて、気がついた。
私自身が困難を得られないというのならば、誰か他の者に代替させればよいのではないか。
他の誰かが魔術の極みへと至る様を、手を貸しながら見守る。こうすれば、対象の者を通じて困難を味わうことが出来るのではないか？

私が魔術を施せば、今日にでも新しい世界の支配者を作ることは可能だ。だが私は飽くまでも手を貸すことに終始し、障害を取り除くのではなくそれを乗り越える手助けをする――

要するに、弟子を取るのだ。もどかしさを味わいつつ、どこまで上り詰めるかを愉しむ、なかなか良い考えなのでは無かろうか。

私という最高の師がつきっきりで修練を行えば、あるいは私に比肩する魔術師が育つかもしれない。中途半端な結果に終わっても、その力を持って弟子が何をするか、というのには少しばかり興味がある。

その力でより良い世を作るか、力による支配を行うか。前者ならば放っておいても良いし、後者ならば世界が取り返しがつかなくなる前に私自身が事を収めればよい。

なるほど、考えるほどに様々な楽しみ方がありそうだ。

私は全知ではないがほぼ全能である。考えうる限りのことは私が独力で行うことが出来るゆえに、他人を頼るという発想は埒外であった。

ふと顎をなぞる。なかなかの妙案だという確信がそうさせた。

そうと決まれば、早速行くか。

善は急げ、という。私にすればたかが数百年の浅瀬ではあるが、魔術の極みを志そうな

どという人間にせっかちでないものはいないだろう。まだまだ奥がある、時間が足りない――などと、不老不死になっている人間がここにいる。

精神を集中させ、遠く遠くにある街を視る。時折、こうして外界を確認していた。飽いた飽いたと日々を暮らす私も、同族である人間が絶滅したとあっては幾ばくかの寂しさを感じるので、滅んだりせぬようにと最低限気は使っているのだ。

遠見の術を使えば、そこにはこの間視たよりもより発展した石造りの街が視えた。

次いで、手を翳す。すると渦巻く闇の門が発生する。

これは『ゲート』と呼んでいる、ある地点と地点を直接繋げる術だ。馬車でも何ヶ月とかかる距離を、一瞬で移動することが出来る。

さて行くかと呟いて、私は闇の門に身体を埋めた。

◆

人気のない路地に発生させたゲートから身体を覗かせる。見られていない事を確認してから、路地より大通りへと場所を移す。

人のいる場所を訪れたのは、何十年ぶりか。詳しくは数えていないが、平和であったことは確認している。

遠見の術で俯瞰して見下ろす光景と、人の目線で見る街は、思っていたよりも姿が違った。

前に来たよりも平均して少しだけ高くなった建造物は、植物が長い年月をかけて生長する様を思わせる。

人の数は多い。そこら中の活気が、ざわめきとなって少しだけ煩わしい――が、久々に見るとなかなかどうして悪くはない。

人混みに紛れ、街を歩く。私の纏う黒いローブはそれなりに目を引くらしく、時折視線を向けられるが、せいぜいが『変わった者がいる』程度の認識のようだ。それだけ多様な存在がいる社会なのだろう。

これが昔、神界を巻き込んで魔界と戦争をしている頃だったら、人々の視線もより攻撃的なものになっていたかもしれない。あの当時は『違う』ということそのものが罪だったのだから。

それに比べると、大分よい世界になったものだ。

これだけ危機感のない人々が溢れていれば、適当な者を見繕って攫ってもよいのだが――肝心の弟子に意欲がないのは問題だ。攫って無理やり魔術を教え込んでも、効率は悪いだろう。

と、なれば。

平和な世でも残る悪習を利用するのも手か。

私が足を止めたのは、奴隷商が構える店の前であった。

奴隷を買う。これならば、無駄に事を荒らげることはない。意欲のほうは、魔術の修練さえしていれば普通の人間と同じように――と、言うのは人里離れた私の住処を考えれば語弊があるが、ともあれ虐げられることは無いという身分を交換条件にする。

それでも学ぶ姿勢がないのならば、適当な場所で放してもいい。

この国における奴隷とは、犯罪者あるいは何らかの理由で身寄りがなくなった者達が売られたか、生活が困難な者が自分を売ることでなるモノ。

保証された衣食住と、誰かの『下』でないという身分は、彼らにとっても悪いものではないはずだ。

両開きの立派なドアを押し開き、中へと入る。

人相の悪い太った男が、私の姿を睨めつけた。

「これは、いらっしゃいませ。奴隷をお求めですか？　それでしたら光の曜日の競りにまた訪れていただきたく存じますが――」

物腰は柔らかく、表情は笑っているが目は笑っていなかった。

なるほど、店が開くのは特定の日だけなのか――と一つ知る物事を咀嚼する。
それにしても奴隷の売り買いが行われる『光の曜日』とは。なんとも皮肉の利いたジョークだ。
「文字が読み書きできる者の中で、最も若い者が欲しい」
が、私は構わずに続けた。煩わしさを嫌ってわざわざここへ足を運んだのだ。
もとより敵意を持っていた奴隷商の眉がわずかに歪む。
が――
「……！　すぐに連れてまいります。文字の読み書きが出来る中で、一番若い者ですね」
すぐさま、今度は満面の笑みで態度を翻す。
私が袖の内より金塊を取り出し、机の上に置いたからだ。
所詮商人、カネというものの価値は高く置かざるを得ない。当然誇りを持って売買を行っている者もいるだろうが、他の人から搾取することを生業としている者達だ。金よりも価値を高く置くモノは――せいぜい、自分の命くらいなものだろう。
とはいえ、それは悪いことではない。奴隷の売買そのものはともかく、商人が金を重んじるのは当然のことだ。自分の命が最も尊いというのも、多くの者にとって綺麗事では誤魔化せない事実だろう。

そんな事を考えていると、奴隷商の男が帰ってきた。そばには、一人の少女を伴っている。
「お待たせいたしました。こちらが今手前どもの出せる、最も若く文字の読み書きを可能とする者ですが――」
言葉とともに手で背を押し、少女が男の前へと出される。
私に一言で言わせれば――中の下。魔力は平均よりやや下で、こんな場所にいることを考えれば高度な魔術の知識も持っていないだろう、ごく普通の少女といったところだった。
しかし、奴隷商は妙に勿体ぶった様子だ。
その理由も、想像はつくが。
続く言葉を引き伸ばした奴隷商を一瞥すると。奴隷商は表情を変えぬままに続けた。
「実はこの少女、さる没落した貴族の娘でしてな。それに、この見た目でしょう？　没落した貴族の娘を自分達の色に染め上げたいというお方は多い。需要に応えるべく、この娘はまだ綺麗な身体でいます。そういうわけでして、手前どもとしては、次の競りでは目玉になると思っているのですよ」
その値を釣り上げようとしているのだ。
貴族の娘。その肩書はなるほど、奴隷を『そういう目的』で買おうとする者達には、価

値のあるものなのだろう。『綺麗な身体』というのはそういう意味だ。

だが外見もある程度は保たれるように努力しているようだ。ストレスか栄養か、健康状態の悪影響は出ているものの、なるほど肌は白く、新雪のような髪は美しく、顔も悪くはない。

加えて重要なのは若い、つまりより多い時間があるということ、文字を教える手間を省くというだけだったが――その目は、少しばかり気に入った。

斯様な身分に身を落としても、決して泣き言は言わない――そう考えているもこの世の本当の悪意を知らない、脆さ。汚れでくすんだ姫の像。その材質は、硝子だ。

彼女を求めるような者の手に渡れば、あっという間に砕けてしまうようなか細い誇り。だがそれ故に磨けば光る、とでも言うべきだろうか。脆くも気高い、そんな心根を表す瞳。

「気に入った。この娘をもらう」

私の声に、少女がびくりと身を震わせる。

やはりそうだ。捨て鉢になったようで、強がっているだけ。とはいえ無理もないだろう。この年頃の少女に、奴隷として生きていかねばならないという現実は重い。

それに、運命の日が早まった上に購入者が得体のしれないローブに身を包んだ男では、同情の余地はある。

「気に入っていただけたようで何より。ですが、今しがた言ったとおり、この娘はとっておきでして――」

しかし奴隷商はこの期に及んで回りくどく話を続けようとする。

わざわざこの場に連れてきたのだ、売る気が無いわけはない。

なんとも、無意味なやり取りだ。

「私はまどろっこしい話は好かん。いくつ欲しいか、貴様で決めろ」

そう告げて、私は再びローブの内から金塊を取り出し、机の上へと置いていく。

それが一つ、二つ、三つ――ごとり、ごとりと音を立てると、奴隷商だけではなく、少女の顔色も変わってきた。

金は造れない。故に金の価値は安定している――というのがこの世界での常識だが、私にそんな常識は関係ない。

ならば「かね」に糸目を付ける必要もない。

「じゅ、十分でございます！　どうぞそちらは仕舞ってくださいませ」

五つ目を積もうとしたところで、奴隷商は慌てて静止の声を発した。

ここまで積めば見栄えが良くなったのだが。しかし私は言われた通りに金を仕舞う。いけ好かない男だが、その嗅覚が気に入った。

まともではないものをまともではないと感じる感性。そこへと深入りしない注意深さ。

人間性はともかく、賢しい行動は嫌いではない。

「へへ……では、こちらが手錠の鍵になります」

卑屈な笑みを浮かべる奴隷商から鍵を受け取り、少女を一瞥する。

少女はまた身を震わせて、漏れ出る声を押し留めていた。

臆病だ。少しやりづらいが、いずれ慣れるだろう。

私は再び『ゲート』を発動し、自宅への門を繋げる。

一昔前、この魔術をはじめとした空間魔術は高等魔術と扱われていたが、現代でもまだ『ゲート』は高等な魔術であるようだ。

「旦那様は――いいや、深くは聞きません。再会はしないことを願っております」

「利口だな」

恐る恐る踏み込もうとして、その足を引いた商人を見ぬまま返す。

代わりにもう一度少女を見ると、少女は今にも泣き出しそうな顔をしていた。

目だけはきつく結ばれているのは、彼女なりの矜持なのだろう。

僅かな逡巡のあと、少女は私の元へと近寄った。

門をくぐればそこは人里離れた私の屋敷だ。

しばしの間、彼女は人の世界から隔絶されて生きていくことになるのだが――
「誰か、別れを告げる者はいるか」
「……いません」
「そうか」
もとより、こんな場所にいる身だ。それがいれば、奴隷になどなっていないだろう。
ゲートに身体半分を埋め、少女の手を引く。
目は強く瞑っていたが、抵抗感はなかった。
そう身構えることもあるまいに。臆病な少女に微笑ましさを感じる。
いくら人の社会では高等魔術とされていても所詮はただの移動魔術。痛みも痒さもあるはずもない。
少女の腕を放すと、少女はようやく目を開いた。そこは既に、私の屋敷だ。
腕の感覚が消えたことで、少女はそっと目を開く。
すると先程までとはがらりと変わった光景に、目を見開いてあちこちを見回し始めた。
「えっ、あ、ここは？」
「私の屋敷だ。念の為言っておくが、ここを出たとて人の里は遥か遠くだ。自死を目的とするのでないならば、脱走など考えぬように」

釘を刺す言葉に、ごくりとつばを飲む。
言いながらに、私は少女の手枷を外していた。
「な、何を……？」
「枷を外しただけだ。それは、私の目的にはそぐわない」
今日は身の振り方を簡単に説明するだけのつもりだが、少女を買ったのは魔術師として修行を受けさせるのが目的だ。
手枷をはめたまま訓練もやろうと思えばあるが、それは今ではないし、そうするとしても魔力なりで適当な枷を作るほうが都合がいい。
だが少女は私の言葉に何か勘違いをしたようで、唇を結ぶ。見てわかる、恐怖の表情だ。
私にすれば随分と見慣れたもので、すぐにわかる。
「では今後の身の振り方を説明する。必要があれば補足はするが、私は無駄を嫌う。二度同じ事を説明するのは避けたいのでよく聞いておけ」
「……っ。はい」
まあ奴隷として買われたのだ。年若い少女が恐怖するのは無理もない。
とはいえ、それは修練の邪魔になりかねない。一つ息を吐いて、私は説明を始める。
「まず――お前を買った目的についてだが、お前には奴隷としての仕事は期待していな

い」

「はい……え？」

「お前を買ったのは、弟子が欲しくなったからだ。故に、魔術の修行を行う事がここでのお前の仕事と言っていい。お前を鍛えてどうこうというつもりもない。得た力は好きに使うが良い」

私の言葉に疑問の声を上げると、少女は目をぐるぐるさせながら私の言葉を必死に噛み砕こうとしていた。

考えていた事と、今の状況があまりにも乖離しすぎていて混乱しているのだろうか。話自体は聞いているようだし、難しい事を言っているつもりはない。今はわからずとも後に理解できるだろうとし、私は続ける。

「修行が仕事と言ったが、当然最低限身の回りの事はやってもらう。自分の部屋は自分で片付ける事、共用部分は整然に。掃除や食事は当番制。ここまではいいか」

「……あの、それはどういう……？」

「人として最低限の事をしろという事だ。それさえしていれば、余暇の時間は何をしていてもよい。最も、この屋敷には本を読むくらいしか娯楽はないが」

修行の他、共同生活を行う上で最低限の事はしろ、と言うと少女の混乱は更に深まった

ようである。

通常こういった雑用は全て弟子に行わせるというのが師弟関係の基本であるようだが、然程の手間でもない事をあえて押し付けようとは思わない。私が彼女に期待をしているのは弟子として魔術の修行に打ち込むその一点だ。無駄に疲労させて修行の効率を落とすのはよろしくない。

言い終わる頃には、少女は混乱しているままではあったものの、幾分か警戒心を薄めていた。単純に、理解が追いつかなくて警戒している余裕をなくしただけかもしれないが。

「ここまでで聞きたい事はあるか」

「正直に申し上げれば、何一つとして理解が出来ません……わたしはその、奴隷で……」

「もう奴隷ではない、それだけだ。先程言ったとおり、お前に期待しているのは弟子としての振る舞いだけだ。それを本分とする限りは、何をしても良い」

とはいえ、目まぐるしく変わる待遇に混乱する気持ちはわかる。

人は急激な環境の変化に強くない。買った時の僅かな反抗心や、不安、今混乱している事から察するに、奴隷としての身分はあまり長くないはずだ。

貴族の娘から奴隷になり、今では魔術師の弟子――それが数日数週間のうちに入れ替わるとなっては、理解も追いつかないだろう。

……ふむ、そうだな。まずは形から入ると言うし、そのあたりから整えていくか。ボロ布を纏っている状態は、確かに奴隷そのものだ。

少女に指を向けると、幼い顔立ちが恐怖に歪む。私は魔力を込め、少女の服を着せ替えた。白と黒を基調とした、単純なブラウスとスカートだ。

「あっ……ふ、服が……!?」

「生憎センスは古いがな。欲しい物があれば、どういったものが欲しいか細かに伝えろ。善処する」

「こ、これで十分です。……一体、ご主人様は何者なんですか？　大掛かりな器具と魔法陣が必要な『ゲート』を使ったり、なにもないところから服を出したり……正直、わたしには想像も付きません」

どこか放心したように聞く少女に、私はほうと息を漏らした。

ここにきて、ようやく少女が自分の意思が介在する言葉を口にしたからだ。

……そういえば、良い機会かもしれない。名前など大した意味はなかったが、共同生活を行う上ではお互いを認識する記号が必要だ。

呼ばれる時は異名ばかりだったし、本名を使うのは本当に久しぶりの事だ。埃を被っている名前を使ういい機会かもしれない。

「見ての通り魔術師だ。名はテオ＝イルヴラム。好きなように呼ぶと良い」

「あ……！　申し訳ございません。主人に先に名乗らせるなど……」

「同じ事を言わせるな。私はお前の主人ではなく、師だ。円滑に技術を伝授する上である程度は敬ってもらうが、奴隷と主人の関係は求めていない」

奴隷としての身分は然程長くない、と感じていたが、それでも身の振り方は叩き込まれているようだ。

案外、物覚えはいいのかもしれない。だとすると、修行の方にも期待ができそうだが。

「それで、お前の名前は？」

「はっ、はい！　あ、アリエッタ＝ペルティアです」

自己紹介を要求すると、少女――いや、アリエッタは困惑しながら名を告げた。

警戒心はもはやそれほど感じないが、根本的に臆病ではあるらしい。

まあ、良い事だ。臆病ならば言い換えれば慎重であるという事。大成する前に潰れてもらっては困るので、その気質は扱いやすい。

「そうか、わかった。ではアリエッタ、食事は済ませたか？　私はこれから昼食を摂るが」

「あ、いえ……あ、お作りします……！」

「それは追々でよい。勝手がわからぬ者に任せても非効率なだけだ。と、そうだな……そこに座っておけ」

動こうとするアリエッタを制してから指を振るい、テーブルの前に椅子を出す。

失念していたが、唐突に弟子を取ると決めたもので日用品を用意するのを忘れていた。後である程度は用意していこう。必要なものがあるならば、本人から告げさせれば良い。

魔術で器具を操り、いつもの食事を作っていく。ある程度型にはめた魔術を同時に施すと独りでにパンが焼かれ、卵がフライパンへと滑り落ち、フライ返しが焼けた目玉焼きを皿へと運ぶ。

ふと背後から、感嘆の息が聞こえた。調理器具達が踊るようにでも見えたか、その目は輝いている。

こういったところから魔術に興味を持つのは良い事だ。思わぬ収穫だったな。

ものの数分で食事の準備を済ませ、配膳する。

アリエッタは席についた私と、自らの前に配膳された食事とを交互に見て、困惑を隠せずにいる。

「食えないものがあったか」

「い、いえ……！　ただ、わたしも頂いてしまっていいのかと……」

「そのために用意した。質素なものだがな。もう少し良いものが食いたいのならば自分の当番で腕を揮え」

「滅相もございません……！　誰かと一緒のお食事なんて久しぶりで、つい……」

やはり、こういうところでも奴隷としての生き方が染み付いているようだった。

どれだけの期間奴隷としての生き方を叩き込まれたかは知らないが、随分と卑屈なものだ。

しかし、そんな脆さがあるからこそ気に入ったのだ。弱さに見合わない誇りを持っている少女が、大きな力を得て何をするか。私はそれに興味を持っている。

私の思惑を露とも知らず、少女は私を窺いながらスプーンを手にとって、スープに口をつけた。

「……あったかい」

その目には、涙が浮かんでいる。

それはスープなのだから当然温かい――と思ったが、奴隷としての身分を教えられるため、あえて冷たい食事を出されていたのかもしれない。

細かい心境はわからないが、それほど感動するものだろうか。心を見ればわかるが、面倒なのでそこまでする必要もない。

こうして、アリエッタとの共同生活が始まった。
食事を喜ばれるというのは、案外悪くない感覚だった。

◆

「伝えてあったとおり、今日より我が弟子として、魔術の修行を受けてもらう。だが、その前にいくつか今後の予定と身の振り方を教えておこう」
「はいっ！」
奴隷の少女――アリエッタを弟子として買った翌日。
私達は館の地下にある広めの空間にやって来ていた。
アリエッタの瞳にはいくらかの輝きが戻り、その態度も昨日と比較するとはっきりとしているように見える。
とはいっても館の地下、と言われてその物々しい響きに『やっぱりもしかして』と怯えていたアリエッタだったが、この広大な空間を見てその不安も払拭されたようだ。
「では説明を始めるが――はじめに言っておこう。私はお前を弟子としてここへ迎え入れたわけだが、なにか特別目的があって弟子を取ったわけではない。長い人生の暇つぶしに思い立っただけだ。それ故に目標となる到達点は設けんし、出来が悪いからといって罰は

与えん。ただ真面目に打ち込む事だけを期待している。そこまでは良いか」
アリエッタの瞳を見ながら、そう告げる。
私の言葉を逃さぬようにと、真剣に聞き入っていたアリエッタは、こくりと頭を下げる。
大して難しい事は言っていないが、突然の非日常だ。もう少し混乱するかとは思っていたが、しっかりと理解しているようだ。どうやら中々地頭の方は良いらしい。
「が、当然見返りは用意している。そうでなければ学ぶ真剣さにも繋がらないだろうと考えての事だ。一つは、ここで魔術を学ぶ以上は生活の事は保障しよう。必要なものは揃えるし、昨日はああ言ったが、街などへ行きたいのならば頻繁でなければ連れて行こう。私物として欲しい物があれば修行への態度によってはいくらでも買ってやる。要するに、修行に打ち込む限りは衣食住において十分以上の生活を約束する。当然、修行の邪魔になるようなものと判断したものについてはその限りではないが」
「はい、当然だと思います」
従順な態度に、頷く。
具体的に邪魔になるものとは？　と聞き返すくらいはいいが、それもないのは好印象だ。
「次に、昨日も言ったが改めて伝えておこう。修行で得た魔術についてはどう扱ってもいいという事だ。恨みがある者に復讐しても良いし、人の為になる事がしたいというのなら

ば好きにすれば良い。順調に私の教えを理解すれば、表向きの世界を統べる事も難しくはないだろう」

「そんなに大それた事は、わたしには……」

「しろとは言っていない。どう使っても自由だという事だ。人類を絶滅させる、などと言い出せば私の不利益にもなるので止めるが、もしも私を超える力を得たのならばそれさえも自由にするがいい」

世界を滅ぼすという意味の言葉に、なんだか難しい顔をしていたが、それでも一応は頷くアリエッタ。

まだ実感がわかないのも無理はない。が、星の一つでも落下させれば、世界は勝手に滅ぶ。もしも彼女が私と同程度の実力まで成長したら、それは指を鳴らす程度の気軽さで可能になる事だ。

それは追々理解していくだろうが、もしも彼女がその事実に気づいた時、どうするだろうか。それもまた興味の対象ではある。

「これらが、私の修行に真面目に励む事の見返りだ。ではそれを放棄する場合――私の修行を受ける意欲に欠ける場合だが、この点については私は何もせん」

「何もしない……ですか？」

自然と、といった様子で聞き返すアリエッタに、私は頷く。

「私の修行を受ける事を拒んだ場合、近くの街で解放しよう。望む場所があるのならば、そこで放してやってもいい」

「ですがそれでは、その……なんの為にわたしを、お買い上げになったのですか？」

「弟子が欲しかったからだ。ただし、真面目に修行に打ち込む者がな。意欲が無いものを弟子としていても意味がない。ならばさっさと見切りをつけて、次へ行ったほうがマシだ。お前を買った時に使った金くらいならば、いくらでも作れるからな」

「き、金を造ったのですか⁉　ですが、金は造れないからこそ高価なのでは……！」

「それは、一般の者の常識だろう。私からすればこの程度は容易い」

と、言いながら私は手元に金塊を出現させてみせた。

金。非常に魔力を通しやすく、また蓄積しやすい性質から、様々な魔術器具に扱う事のできる希少な物質だ。用途は多岐にわたり、そして美しい。人の歴史では今まで多くの者がこれを求め、争ってきた。

そもそもの採取量が少ないのはもちろん、何よりも厄介なのがこの物質が造れない、という事だ。何人もの魔術師がこれの生成に挑戦したが、実現できた者はいない。

……というのが一般的な魔術師の間の話である。私に言わせればこんなものは、銅や鉄

を造るのと然程変わらない、取るに足りない物質である。

多くの魔術師達は様々なアプローチから金の生成にチャレンジしてきたが、なんて事はない。この物質は魔力を蓄積しやすい性質を持つ事から、生成する際により多くの魔力を必要とするだけなのだ。一般の魔術師では金を生成する魔力が足りないと言うだけで、理論は鉄や銅などを造る際と同じ。百人ほど集まれば、ひとかけら程度の金は作れるだろう。

今までそんな簡単な事が実現できていないのは、端からできる訳がないと思い込んでしまっているだけだ。現実問題としてそれなりの水準にある魔術師を集めるのは難しいのだろうが、それ故に金は依然として希少なままだというわけだ。

話は逸れたがともかく、一般社会では希少とされる物質も、いくらでも作れる私からすればその辺の石塊と変わらない。

奴隷を買う際に必要とされるのは手間だけだ。今回は『作り変える』事を自ら禁じた以上、心変わりを待つよりは次の弟子を用意したほうが早い。

「が、私はお人好しではない。解放はするがそれまでだ、その先まで面倒を見てやる義理は感じん。自力で生活するもよし、奴隷に戻るもまたよし。そうなりたくなければ、最低限真面目に修行を受けるように」

真面目にやっているかどうかは、魔力の流れを見ればわかる。

その動機は『仕事』でもよい。人としての生活が惜しければ真面目にやれと、そう言っている。

私の言葉に、アリエッタは頷いた。しかし表情は先程よりも重く、だ。

「気負う必要はない。真面目に上達を目指すのならば私からは言う事はない。究極の魔術師を作るというのならば、手段はいくらでもあるのだから。ただお前が出来る事をすれば、私からお前を見捨てる事はない」

どうやら真面目に修行を受けるつもりはあるようだ。その瞳を見れば、なんとなくわかった。

となればあまり硬くなられても意味はない。

『真面目である限りは見放さない』。これだけわかってもらえればよく、それを理解したのだろう、アリエッタの表情は柔らかく緩んだ。

「わかったのならば良い。では次いで、これからの行程を組み立てる。アリエッタ、お前は魔術はどの程度扱える？」

まずは身の振り方を教えたところで、ようやく私は本題に入っていく。

どこまで、は決めていないが、彼女がどれくらい魔術を扱えるかという『どこから』は設定する必要があるからだ。

大なり小なり、この世界に住まう者はある程度は必ず魔術を扱えると言ってもいいだろう。薪に火を灯したり、光を夜の明かりとしたり、魔術は生活の一部に根ざしている。

いわば原始に置ける石と火だ。これがなければ生活できない、というものである。

故にこの国では魔術を教える学校がいくつもあるし、それがない地域では親から子へ、自活能力の一部として教え込まれる。

だが――貴族の出とはいえ、アリエッタは十二歳。本来ならばそろそろ魔術を学び始めるという年齢だ。

貴族の娘だったという過去を考えればより早く教えられていても不思議はないが、娘が奴隷になるまで落ちぶれた家だ。予習の類は期待できないだろう。

「……その、正直、殆ど何も知りません。指先に火を灯すくらいは出来ますが――」

予想通り、アリエッタの魔術知識は殆どまっさらの状態と言って良かった。

比喩でもなんでもない、子供の火遊び程度というわけだ。

「そうか。ならば一から教える事とする」

「すみません。そういった事は教えられていなかったもので……」

「いいや、かえって都合が良い」

が、それは私にとってはどうでも良かった。

もともと弟子に何かを教え込むというそれ自体が目的だ。新雪の野というのならば、それは好都合。

わずかに考え、決めた。

「まずは三年間、私の下で修行を受けてもらう。そうして基本を学んだ後、高等学校にて学んだ力を試す。その成果を確かめるというのも意欲に繋がろう」

「……！　奴隷のわたしが、学校にまで通わせてもらえるのですか……!?」

「その頃には、学校の授業など不要になっているだろうがな。……いや、人の世で生きる術は身につけられるか。まあよい、それが励みになると言うのならば、精々うまくやれ」

「はいっ！」

私からすれば、学校など年齢に合わせた低度な教育を受ける場と言ったものだが――普通に生きる場合には、役立つ知識も教えてくれるというものか。

とりあえずのところやる気につながれば何でも良い。

見るからに朗らかな笑みを浮かべるさまは、微笑ましいと感じるものだ。少なくとも先程よりは明らかにやる気を増している。ならば鉄は熱いうちに打つとしよう。

「では、話も固まったところで早速実践に入るとしようか」

「よ、よろしくおねがいします！」

姿勢を正し、アリエッタは私を見つめる。
魔術の教育を受けていなかったと言うが、それ以外の作法などは学んだのだろうか。物事を学ぶ姿勢としては好印象だ。
さて、これからようやく魔法の修行――いいや、この段階ではまだ授業というべきか――を始めていくわけだが。
「先程、お前は指先に火を灯すくらいならばできると言ったな。今もそれは可能か？　やってみせろ」
指先に火を灯す。それは文字通り子供の火遊びだ。
アリエッタも元とは言えど貴族の娘、火遊びなど普段からするものでもないだろう。
となれば、もっと幼い頃に一度したきりで、今はそれさえ忘れている可能性もないではない。
「わかりました……ん、これでよろしいですか？」
が、それは杞憂であったようだ。アリエッタが集中し、指先に魔力を集めると、そこに火が灯る。
細い蠟燭の様にか細い火だが、及第点だ。
「よろしい。ではその火をより大きくしてみせよ。方法は問わん」

「大きく、ですか。ええと、やってみます」
基礎の基礎ができるという事がわかれば十分。ならば発展型は。
火を大きくする。なぜそんな事をさせるかと言えば、この少女の素質を測るのが目的だ。
魔力などを感じ取れば、才能はわかる。それだけを言うのならば、アリエッタの才能は下の中と言ったところ。
生まれ持った魔力は少なめ、ろくな手ほどきも受けていなかったのならば当然といった程度だ。
が、魔術というのは才能だけではない。素質というのもまた、同じかそれ以上に重要なものだ。
「……」
指先に灯した火をにらみながら、アリエッタは思考している。
さてこの子はどうするか。私は腕組みをし、観察する。
やがて、アリエッタははっと息を飲んで、目を見開いた。
アリエッタが選んだ方法は――もう一つ、既に火を灯した右手の人差し指とは逆の、左手の指に火を灯す方法だった。
それを、近づけた。火を灯した指と指を合わせる事で、火もまた大きくなる。

「これでいかがでしょうかっ！」
思惑がうまくいった事に喜んでいるのだろう、その顔は笑みを浮かべていた。
が、思わず感情が昂ぶった事に気が付くと、表情に不安の帳が下りていく。
「あっ、も、申し訳ございません……！　つい……！」
どうやらまだ奴隷気分が抜けていないようだ。
まあ、この分だとすぐにそれも忘れていくだろうが。
しかしそれでいちいち修行に身が入らなくなるのも問題だ。
これを払拭したい。そう考えた私は、アリエッタに歩み寄り、小さな頭を撫でる。
「よく出来た。いい発想だ」
「……！　ありがとうございます！」
実際に良い発想だったのは事実だ。
どういう方法でもいい、と言ったのはアリエッタのものを考える力を見たかったからだ。
「火を大きくする方法はいくつもある。お前が選んだのは、私が考えうる中でも簡単な部類の方法だった」
「それは……」
「褒めている。同じ結果を導くのならば、より簡単なほうが良いに決まっている。高度な

技術を測る事が目的の課題ならばまだしも、結果そのものを見るのならば小難しい事を省いてこそというものだ」
どうもこの子にはより素直な言葉を使った方がいいらしい。
称賛の言葉を送ると、アリエッタの顔がみるみる明るくなっていく。
喜びというものは優秀な原動力だ。それを縛る理由もない。
「この課題で私が見たかったのは、お前の発想力だ。炎を大きくする方法はいくらでもある。指ではなく手に炎を纏わせる、単純に込める魔力を増やす。シンプルなのだとこのあたりだが、これはどちらも指先に火を灯すよりも高度な技術を要求するものだ。今持つ手札で最も楽にそれを行ってみせたお前の考えは、評価に値する」
「ありがとうございます……その、なんと言ったらいいか」
「そのまま受け取ればよい。が、驕るなよ。お前の性格ならばそれほど心配はしていないが」
「お、驕るなんてとんでもありません。ただ、人から褒められたのは久しぶりで……やっぱり嬉しいです」
一応は驕るなと釘を刺したが、もとより心配はあまりしていなかった。
……しかし、なんだ。

アリエッタは私に褒められて、嬉しそうにしている。これが案外、悪くない気分だった。
真面目な態度は弟子として好ましいものだ。だがこの些細な結果に一喜一憂する姿というのも、師である私にとって悪くない。
指を合わせたまま愛おしそうに火を見つめる少女。これがいじらしさというものなのだろうか。
「ともあれ、話をまとめよう。同じ様に『火を大きくする』という課題にも、様々な解決法がある事はわかったな。これは火に限らん。結果を求める際、より楽でよりコストの低い方法を求め続けろ。勤勉はやがて楽に行き着く――それが、私の歩んできた魔術の道だ」
「はい！」
「良い返事だ。では、授業を続ける」
私がアリエッタに施した最初の授業。それは彼女の魔術の素質と勤勉さを測る事だった。
彼女は真面目で、勤勉だ。なかなかよい弟子となるだろう。
知らず、私は久方ぶりにはっきりと自分の中にある興味と楽しさを感じていた。
魔力という才能を持たない少女が、どこまで強くなれるか、優秀な魔術師になれるか。
魔力は修練次第で増やす事ができるが、素質というものは生まれつきのものでどうしよ

うもない。
それを考えれば――案外、歴史に名前を残すくらいは出来るのかもしれん。
新たに出した課題に四苦八苦しながらも、真面目さでそれを乗り越え、喜びに笑みを浮かべるアリエッタ。
弟子を持つというのも悪くはない。私の考えはやはり間違っていなかったようだ。
火が炎へ。水滴が飛沫へ。わずかずつながら歩みを進めるたびに、アリエッタは私にそれを見せる。
「出来ました！　ご主人さ――あっ！　も、申し訳ございません」
が、どうにもこれが不便だ。呼び方は何でも良いといったが、自分の身分で使うべきではない呼び方をされるのはよろしくない。
アリエッタの本分は、弟子だ。奴隷ではない。
「気にしない。が、いつまでもそれでは面倒だ。今この場で呼ぶ名を決めろ」
「い、今ですか!?」
突然の事に思わず聞き返し、いままであった謝罪がなくなる。徐々にいい方向に進んでいるのは確かだが、流石にまどろっこしかった。
前の生活の名残か、現在のアリエッタは自分の意思が少ない。そのため、今は多少強引

にでも進めるほうが都合がいい。
その上で、自分で呼び名を決めさせる事で自主性を育もうというのが魂胆だ。
より強い言葉での言いつけに、アリエッタは頭を抱えんばかりに悩んでいる。
「では――その、よろしければ、先生と呼ばせてはいただけませんか？」
頬を赤らめながら、アリエッタは控えめに微笑んでそう言った。
先生、先生か。私はその呼び名を反復する。
過去、そう呼ばれた事がなかったわけではない。が、それらは基本的に腹の黒い大人達が揉み手で呼ぶような名前だった。
しかしこれはどうだ。同じ呼び名でも、彼女に呼ばれると悪くない。どころか、耳に心地よい。
長く、様々な事をしてきた人生だ。呼び名程度、なんでもよい。
そのはずだったのだが――
「悪くない。好きにしろ」
「はい！　ありがとうございます、先生！」
一対一で親愛の情を示される。これは初めての経験だった。
小恥ずかしくも、私は明確に現在を楽しんでいた。

人付き合いは面倒だと、千年以上は避けてきたがそれ故か、結構に刺激的な時間である。
「ふん、今日はこのくらいにしておくか」
「え？　もう、ですか？　わたしはまだ出来ますが……」
「家事は分担だと言ったろう。調理器具や、掃除用具の場所など、教えねばならんからな」
「あっ……そうでした。ありがとうございます」
家の事を教えるといえば、なぜだかアリエッタはやはり嬉しそうにしてみせる。
それを見ていると心が温かくなるようで――
「なんとも調子が狂う」
過去の私が今の私を見たらなんと言うだろうか。
気取っているつもりはないが、これでは少しばかり自分が情けなく思う。
地下室を出ると、背後から小さく軽い足取りがついてくるのがわかる。
案外、子を持つ親というのはこのような気持ちなのだろうか？　考えてもわからない事を考えつつも、私は地下より出る階段を上った。

◆

私の名はテオ＝イルヴラム。自他ともに認める、史上最大最高の魔術師だ。
食事も必要とせず、睡眠も必要とせず、性欲も完璧に律し切る事が出来る不老不死の存在――そんな私の朝というものは、それでも眠りから目覚める事で始まる。
不要とは言っても心地が良い事には良いからだ。
娯楽としての睡眠。それはいつ起きてもよく、いつまで寝ていてもよいものだ。
故に退屈で仕方がない時には一月ほど眠り続けた事もある。が、それは元々稀な事。特に最近――アリエッタを弟子に取ってからはちゃんと毎朝、決まった時間に起きている。
「あっ……先生！　朝食が出来ましたよ。今日は目玉焼きを焼いてみました。マーマレードも作ってみたのですが、パンと一緒にいかがですか？」
リビングへと移動すると、エプロンを着けたアリエッタが朝食を作って待っている。
これも、お決まりの光景だ。食事もまた、私には必要ではないものではあるが――
「お前が作ったものなら、いただこう。……いい香りだな」
「はいっ。そう言っていただけると、わたしも嬉しいです」
前言撤回。食事は心の潤いのためには必要不可欠のものである。
マーマレードは甘酸っぱい香りがなんともさっぱりとしていて、これぞ目覚ましいというものだ。

穏やかで、それでいて開く花のように爛漫なアリエッタの笑顔に、思わず私も頬が緩む。
――アリエッタが我が弟子となって、三年の月日が過ぎようとしていた。
極限まで無味無臭に引き伸ばされていた退屈な時間はもはや影もなく、濃密で刺激的な日々は矢のように過ぎていくようだと感じている。
その三年の月日での変化を最も強く感じるのが、この時間であった。
本人たっての希望で家事は全てをアリエッタが取り仕切る事になり、それに伴って朝昼晩は食事を囲みながら談笑などするようになった。
昔の私ならば暇に飽かしてムダな事をするようになったものだと嗤ったろうが、今この場にいる私ははっきりと言える。こうした『余裕』を無駄と馬鹿にしていたからこそ、あの無味無臭で無意味な日々があったのだと。
トーストにアリエッタの作ってくれた柑橘のジャムを塗る。
爽やかな香りがトーストの熱気に伴って立ち上り、一口かじれば良く焼き上げられたパンのさっくりとした歯ごたえが心地よさを強調し、次いで中のふんわりとした食感が甘さを包み込む。
「……美味い。砂糖の量が良い。この甘さは好みだ」
「ありがとうございます。先生の好みは把握していますから」

変化は私だけに訪れたものではない。
アリエッタもそうだ。彼女が家に来たばかりの頃にあった卑屈さのようなものは消え、今では非常によく笑うようになった。
穏やかで淑やかで、どこに出しても恥ずかしくない美しい娘になったと言えるだろう。
そう、どこに出しても――
「アリエッタ」
「はい先生。いかがなさいましたか？」
食事の手を止め、アリエッタの瞳を見る。
そうするだけでアリエッタも同じようにし、話を聞く態勢を整えた。
三年の月日は、矢の如く過ぎ去ろうとしている――
「前に学校に行かせるという話をしたな。その事について、少し話をしておこうと思うのだが」
「学校ですか……ではここに来てからもう三年にもなるんですね」
この話をするのは少し躊躇った。
弟子を取り、修行をつける。完全に思いつきで始めた事だったが、それは想像を遥かに超えて楽しく、今では私の生き甲斐と言っても過言ではないものとなっていたからだ。

生まれつきの魔力には優れなかったものの、アリエッタは勤勉でかつ頭の回転も速い。未熟故にその伸び幅は目覚ましく、めきめきと上達していく様を見るのは、若かりし頃に魔術を究めんと打ち込んでいた頃の自分を思い出す――
……いや、自らの心を偽る必要もあるまい。正直なところ、アリエッタと離れる事に乗り気ではないのだ。
この穏やかな時間も今や私にとってかけがえのないものだ。――この国の高等学校は三年間通う事になる。前までの私ならば一瞬と認識する時間だが、アリエッタの居ない三年間など想像もしたくない。
「その……学校は、必要なものなのでしょうか。昔は学校に通える事を嬉しく思っていたのも確かです。でも、先生の教えの方が、ずっと有意義なように思えます」
そしてそれは、アリエッタにとっても同じだと思っている。
言う通り、昔は彼女も学校に行けるという事を励みにしていた。が、今ではこうしてここに残りたいと感じられる事を言っている。
実際に魔術に関して言えば学校で教える事よりも私の教えの方がずっと優れているのは事実だ。魔術の深奥を見た私の教えは最短にして最優。いかにアリエッタの素質があったとはいえ、三年という月日で彼女を『今のレベル』まで育てられるのは私くらいのものだ

ろう。
「それは事実だが、私では魔術以外の学問というものを――この国の常識というものを教えられん。自立し、外で暮らす際に最低限の常識がないというのでは困るだろう」
だが、教養となるとそうもいかない。
もしもこの先彼女が私の下を離れ、外で生活したいとなった場合、世の歩き方を知らないというのは問題だ。
「……わたしはずっと、先生の下で暮らしたいと思っています。それがご迷惑になるのでしょうか」
「迷惑になどなる筈がなかろう。が、それでも外でなにかやりたい事が見つからないとも限るまい」
「でも……いいえ、ありがとうございます。先生は、わたしの事を思って言ってくださっているのですよね」
「む……まあ、そうだな」
くすりと笑うアリエッタに、ついぶっきらぼうな返事をする。
全く、そういうのはわかっていても言わぬが花であろうに。が、まあ誤解されるというのも本意ではない。

「しかしだ、未熟なままに力試しというものもないだろう。その前に私なりの入学試験というものを受けてもらう。今のお前ならば容易く合格出来る課題を課すつもりだ、手は抜かぬように」
「勿論です。先生の仰る事にわたしが手を抜くなんて、ありえません」
言いつつも、私はアリエッタが手を抜くなどとは考えていなかった。
不老不死とはいえ、誰かと暮らす三年というものは短いとは言えない期間だ。お互いの事はよくわかっている。
……アリエッタの方も、私の本心など見通している事だろう。これが最強の魔術師の姿かと、まったくもって情けない話だと思うが、それも最早慣れてきた。
「食事を済ませたら試験を始めるとしよう。なにか準備があるなら済ませるまで待つが」
「大丈夫です。心の準備は済ませておきましたから」
「ならばよい」
ぶっきらぼうに返して、止めていた食事の手を進める。
それをみて、アリエッタはくすりと鼻を鳴らした。
アリエッタの微笑みに私を馬鹿にする感情が含まれていないからというのもあるだろう。だが――私を知る者が私を笑う、なんていうのは、ここ千年はなかった事だった。だがこ

うして笑われてみると、存外悪くはない。
「先生」
「なんだ」
「ありがとうございます」
「……ふん」
改めて礼を言われると、私は小恥ずかしくて不機嫌とも取れる返事をしてしまう。
だがアリエッタは、それを見ては穏やかに笑うのだ。
魔術に打ち込んできた千と数百年。不要と断じていた人との会話は思った以上に面白く——また、難しい。

◆

先生と別れてから、数十分ほど。
わたしは『竜の谷』を一人で歩いていた。
竜の谷は、人里離れた土地にある荒れた渓谷だ。
草木は見当たらず、あっても枯れ木だけ。谷を作る岩は全てが六角形に整っていて、その不思議な光景には思わずため息が漏れる。

整然とした形が立ち並ぶ光景は綺麗だけどあまりにも整いすぎた光景はなにかの意思を感じさせて、不気味でもあった。
「ふう……暑いですね」
竜の谷の暑さに、つい息が漏れる。
先生の屋敷は魔術でいつも心地よい室温に保たれているけれど、ここにはそんなものはない。
街にいた頃の夏も——奴隷として押し込められていた部屋だってこんなに暑くはなかったんだけど。
こんな場所があると本の知識では知っていたけれど、実際に来てみるととてつもない暑さで——耐熱耐暑の魔術がなければ、数十マートル歩くのにも苦労するだろう。
「それにしても、本当に静か。先生の仰るとおり、魔物も全然いない……」
少し歩くと、静けさがまた不気味で独り言が漏れる。
この暑さととある理由から、この竜の谷には人だけではなく魔物も殆ど訪れる事がないという。
けれど、暑いだけで不毛の大地かと言えばそうでもない。ここには高密度の魔石がたくさん埋まっているとか。

ひとかたまりを持っていくだけでしばらく不自由ない生活が送れるらしいけど、それでもここに人が来ないのにはわけがある。

それはやはり、地名を見ればすぐに察しが付くだろう。

殆ど魔物が寄り付かない中、ここを根城とする『主』の存在があるからだ。

「……ドラゴン。実物を、自分の目で見る事になるとは思いませんでしたけど」

ようやく目的地にたどり着いたわたしの眼前には、全身を紅い鱗で覆った巨大な竜――レッドドラゴンが自らの腕を枕に眠っていた。

防護の魔術無しでは肌が焦げるような暑さの中も、この渓谷を居城とする彼にとっては心地よい日差しくらいなものなのだろう。

――先生がわたしに課した試練の内容。それは『竜の谷』をたった一匹で治める魔物、レッドドラゴンを退治する事だった。

このドラゴンは、魔石を狙った魔術師や――その仇討ちに訪れた者をもう何人も返り討ちにしているという。その所業は地名になるほどに恐れられる、まさしく伝説の存在だ。

けれど、先生はそんな恐ろしい怪物を『丁度いい相手』と仰っていた。――そう言ってもらえるのならば、わたしに恐れはない。先生の言葉が間違っていた事はないのだから。

身に纏う魔力を、更に引き上げる。すると、眠っていたドラゴンは鎌首をもたげるよう

に頭を上げ、わたしの姿を捉えた。

「コォルルルルル……」

喉を通った空気が炎と化して、竜の口の端から漏れ出る。

ドラゴンは知性が高いと聞く。そのためだろうか、その表情はどこか人間的で、怒っている事がすぐに伝わってきた。

ドラゴン。竜種とも呼ばれる彼らは様々な種類がいるが、その多くが色々な場所で王者として君臨する、生態系における絶対強者だ。

その脅威度は人間にとっても非常に高く、彼らが人の生活圏の近くに現れれば、国が凄腕の魔術師を何人も集めて討伐に向かうという。

レッドドラゴンはその竜種の中でも上位に位置する、強力な魔物の代名詞だ。

地域によっては悪い事はレッドドラゴンを呼び寄せると言って、子供を躾けたりもするらしい。

幸いにして個体数は少ないらしいけど、その存在はこの渓谷で確認されてから長い、伝説に最も近い竜種だ。

そう――少なくともそれは、この間まで奴隷だったごく普通の女の子が勝てるような相手ではない。

国が定める魔術師の等級、その中でも一番上か規格外とされる凄腕の魔術師を最低でも十人以上集めてはじめて討伐に向かうような存在だ。

たかが十五歳の娘が一人、彼のおやつにもなれないだろう。

そう、普通ならば。

「オオオオオオォォッ！」

レッドドラゴンが人一人を丸呑みにするような大きな口を開けて、咆哮を轟かせる。

彼はわたしを明確な敵として認識したみたいだ。といってもそれはまだ命を脅かす外敵としてではなく、縄張りを侵した侵入者としての話。

四足で立ち上がったドラゴンは上げた首を更に反らし、魔力を溜めている。

魔力は喉の下にある『竜胆』と呼ばれる機関に収束され、炎の魔力に変換されていく。

ドラゴンブレスと呼ばれる、竜種の扱う魔術だ。中でもレッドドラゴンのそれは、凄まじい高熱によって一瞬にして命を炭へと変え、暴風を持って塵と砕く地獄の火炎『ファイアブレス』と呼ばれる。

けれど、わたしは慌てなかった。もちろんそれは死を覚悟したからじゃない。

それがわたしには通じない事を既に知っていたからだ。

集められた魔力が一気に膨れ上がり、喉を通ってわたしへと放たれる。

わたしはそれに対して、右手を翳した。

炎の魔術は、わたしだって得意だ。

「『フレイムスロワー』」

その魔術の名を呟くと、わたしの手から放射状に広がる炎が飛び出した。

これは炎を放つ簡単な魔術だ。攻撃範囲の広さから、面への攻撃に対する防御や、一対多数の戦いで役に立つわたしの得意な魔術。

それは放たれた地獄の火炎を飲み込んで、レッドドラゴンをも包み込んだ。

レッドドラゴンは炎に包まれ火だるまとなり、激しく暴れている。

そこらの魔物なら、あるいは他の属性の竜ならこれで勝負はついていただろうけど――

「ガギィッ！」

魔力を込めて大きく翼をはためかせる事で、レッドドラゴンは炎を打ち払った。

ところどころ焦げているが、ダメージは少ないだろう。ただし、その表情は先程までのものとは違い、より深く激しい憤怒を宿していた。

炎を扱う魔物と言えば、と名前が上がるレッドドラゴン。炎属性の魔術に対する耐性は凄まじいものだった。

「やっぱり――すごい対魔力ですね」

ついその防御力に称賛が出る。

最も伝説に近い――いや、生ける伝説ともされるほど有力な魔物だけはある。

膨大な財宝が眠る場所を棲家としながらも、今日に至るまで場所を譲らずにいた永く生きた魔物の力は、確かにちょっとやそっとではなんともならないものだと思う。

「ゴァルガァァァッッ！」

激しい怒りを咆哮に、そして魔力へと変えたレッドドラゴンが、二足をもって立ち上がる。

開いた両手で、広げた羽で凄まじい魔力を集め、巨大な火球を形成する。

竜の体軀よりも大きな火球――だがそれは谷の幅いっぱいになった点から急速に小さくなっていく。

しかしこれはしぼんでいるのではない。凝縮されているのだ。魔力を高密度に固める事で、精密な制御や豊富な応用を可能とする技術。

……流石、知性が高いとされるレッドドラゴン。その技術は高等と呼ばれる技術の一つだ。まずは基本からという事で、わたしも未だに習っていない技術である。

先程の『フレイムスロワー』を見て、放射状に広がる魔術を一点突破で貫く事を考えたのだろう。高度な魔術を扱い、頭の回転も速い。なるほど、竜種が脅威とされるわけだ。

「でも」

しかし――そこまでだ。

いかに高等な技術とはいえ、戦略とはいえ――

今は、わたしのほうが強い。

「ギャガルアァァッ！」

竜が広げた腕を交差し、また開く事で高密度の火球は放たれた。

わたしは両手を前に突き出して、それを迎え撃つ。

「『ペネトレイト』っ！」

両腕の中心から魔力の塊が放たれる。

『凝縮』する事はまだ出来ないが、予め『収束』した魔力を放つ事はわたしにも出来る。

凝縮のそれと比べれば収束の魔力密度は低い。だが――

「グギャッ！」

そもそもの魔力の質が、量が。わたしの方が彼よりも上なのだ。

光線のように放たれた魔力は火球を打ち消して、竜の腹部を貫いた。狙いを絞ったぶん傷は小さいが、完全に貫通した傷は致命傷となるだろう。

体勢を崩したレッドドラゴンが倒れ込み、わたしに向けられた瞳が射殺すような視線を

送ってくる。
勝負あり、だろう。
先程の火球はおそらく、彼の全力を込めたものだ。
倒れ伏すレッドドラゴンが動けない事から、それはわかる。もしも動けるのならば彼はきっとすぐに立ち上がってわたしへと向かってきただろうから。
でも、彼はそうしなかった。しかし、逃げる事も選ばなかった。
竜種は皆誇り高いと言う。彼もきっとそうなのだろう。
その気高さには、憧れを感じた。
――あの日、わたしが奴隷だった頃。わたしは気高くあろうと強がっていた。
どんな責め苦にも決して声を荒らげてみせるものかと、身体はどんなに汚れても、心だけは綺麗であろうと。
だけどそれは、あの日先生に買われなければすぐに砕け散っていた脆い覚悟だったと、今では思う。
幸いわたしは汚れを知らないまま先生の元に来る事が出来て、大きな苦しみにも絶望にも遭う事なく、今でははっきりと幸せだと言えるくらいになった。
だからこそ、わたしはあのまま奴隷でいたら出会っていただろう苦しみが、怖い。

その中で一番怖いものの一つが――『死』だ。

わたしが最も恐れるものの一つを前にして、逃げようともしないレッドドラゴンの姿は、わたしにとっては眩しくも思えた。

「静かに暮らしているところをごめんなさい。許してくれとは言わないけれど、わたしはもう邪魔しませんから」

だから――わたしはレッドドラゴンに歩み寄る。敵意の視線が貫いてくるが、わたしは意に介さずレッドドラゴンの身体に触れた。

そして、治癒の魔術を発動する。

レッドドラゴンの胴体に開いた風穴がみるみるうちに塞がっていき、すぐに消えてなくなった。

レッドドラゴンが目を見開く。

震えながら立ち上がろうとする彼からそっと離れ、わたしは最後に一度だけ振り返った。

試験の内容はレッドドラゴンを倒す事。

どうしろとは言われていないので、頓智を好む先生ならこの結果も笑って受け入れてくれるだろう。

……できれば彼を殺したくなかった。

たぶん彼がこの場所に住み着いたのは、上質な魔石という最高の食料があるからだ。

魔物は魔力さえ摂取すれば生きていけるという。魔力を摂取するために効率が良いのが大きな魔力を持つ生物を食べる事だけど、魔石というもっと上質で大量の魔力を摂取できる食べ物がある彼には、人を襲う理由がない。

わたしが知る限り、このレッドドラゴンがもたらした被害というのは、魔石を狙ってやって来た人を返り討ちにしただけだ。

それだって良い事ではないけれど、奪われるものを守るというのは、全ての者に等しく与えられた権利だと思う。

それに今では、彼よりもわたしの方が強い。

虐げられてきた過去があるからこそ、過度に誰かを虐げる事はしたくなかった。

きっと先生も、わたしの考えはわかってくれると思う。

「できれば――やって来た人にも少しだけ優しくしてくれると嬉しいです」

偽善なのかもしれないけど、過去の事を考えるとわたしは人間至上主義者にはなれない。

彼の持つ土地で何が起こっても、それは自然の摂理だ。

癒えた傷が馴染んだか、レッドドラゴンはわたしを見つめている。

この分なら、大丈夫そうだ。ほっと一つ息を吐いて、わたしは先生が待つ場所へ帰るた

めに踵を返す。
背後からの攻撃は、やってこなかった。本当に気高い生物だ。

◆

「先生っ！」
試練を終えたら帰ってこいと指定された場所にたどり着くと、そこには既に先生が待っていた。
そのお姿を確認したわたしはいても立ってもいられなくなって駆け出す。
思い切り飛びつくと、先生は事も無げにわたしを受け止めてくれた。
「魔術師の眼で試練は見ていた」
「結果は如何でしたか？」
このままずっとそうしていたいのを我慢して、埋めた顔を上げると、わたしよりも高い位置にある先生の瞳と目が合う。
——切れ長の瞳。その美しさに、思わず息が漏れる。先生の強い意志を感じさせる瞳は一見無感動のようにも見えるけれど、その実感情の動きで様々な形に変化して、アレキサンドライトのよう。

今もこうしてわたしを見つめる瞳は親愛の情でわずかに角が取れており、確かな愛情を感じさせてくれる、大好きなものだ。
先生自身が外見に無頓着なので茶髪は無造作に整えられているだけだけど、それがまた格好いい。
輪郭は細いながらも力強く男性的で、よく整った目鼻立ちとお互いを引き立てるよう。
何度見ても、見惚れてしまうくらいだった。
先生は不老不死なので二十代の頃の姿に保っていると言うけれど、きっと十代のお姿も、五十代のお姿も変わらずに美しいのだろうと時折夢想してしまう事がある。
先生に見惚れていると、先生はまた表情を変えた。
ぶっきらぼうな時は、少し恥ずかしがっているときだ。不老不死、変幻自在の無敵の魔術師だと言うのに、そうした様はまるで同年代の少年と話すのはこんな感覚なのかなと思わせる。
それがまた可愛らしくて、思わず頬が緩んだ。
「合格の他あるまい。此度の試練は力を示す事が目的だ。殺害しろとも追い払えとも言っていない以上、竜を圧倒する力を見せただけで十分にすぎる」
「ありがとうございますっ！」

先生はきっと、わたしの選択をお許しになると思っていた。
それでも先生が認めてくれた事が嬉しくて、わたしは顔を埋めるように強く抱きついた。
すると、自然と先生の手が頭に伸びてきて、優しく撫でてくれる。
わたしは、これがたまらなく好きだった。
――はじめに自覚したのは、親としての『好き』だった。
奴隷にその身をやつす前、わたしは弱小貴族の一人娘だった。
魔力も力もない、人脈もないペルティア家は没落寸前で、お家にはいつも険悪な空気が漂っていたと思う。
だからこそ、年長者としての先生の愛情が愛おしかった。
こうして褒められる事が、何よりも楽しい事になっていた。
褒められるのが楽しければ、より魔術の修行に打ち込む事が出来る。魔術の修行に打ち込めば、先生がもっとわたしを好きになってくれる。
それが、何よりも嬉しかった。
けれどある時、わたしが先生に抱く感情は親に向けるそれとは違う事に気がついた。
先生は何でも出来るけど時折、特にわたしと接する際には不器用である事も多く、何でも出来る史上最大最高の魔術師にも苦手な事があるなんて、と微笑ましく思ったものだ。

でもそれは違うと気づいた。先生が不器用なのは、わたしを大切に思ってくれているからだと。わたしを大切に思うからこそ傷つけないように、楽しめるようにと気を回してくれているのだと。
それに気づいてしまった時――わたしは、恋に落ちていた。
「これならば、魔術学園でも恥をかく事はないだろう。どころか、学業の範囲内ならばなんでも思うがままに出来るはずだ。しばしの休暇と割り切り、羽を伸ばしてくるがいい」
だから、これから三年間、魔術学園に通わなければいけないのは憂鬱だった。
はじめは確かに、一度奴隷に身を落としたわたしが学校に行けるなんてと舞い上がったけれど、今は違う。魔術は先生から直接教えてもらった方が遥かにしっかり学べるし、三年間も先生と会えないのはあまりにも辛い。
確かに先生の言う通り人間の社会の事は学べるけれど、出来る事ならばわたしは先生とずっと一緒に二人きりで過ごしたいと思っている。
そう、ずっと一緒に。だからこそ、本当なら遊んでいる時間なんてないのだ。
「本当は先生の下で魔術を教えていただきたいけど……先生の仰る事ですから、この機会に楽しんできますね」
「……うむ。それでいい。今の自分がどれほど優秀であるか、確認してこい」

けれど、これも先生の優しさだ。それを無下にする事は出来なかった。
だから考え方を変える事にする。これもまた、わたしが目指す存在になるために必要な事なのだと。
――わたしには、目標がある。
最初は先生に褒められたい一心で頑張っていた魔術だけれど、今はとある一点を目指して魔術の道を邁進している。
その目的とは『先生とずっと一緒にいる事』だ。
でも、今のわたしではそれは出来ない。なぜなら、先生は不老不死の存在だからだ。
だからこそ、わたしがわたしの道を歩む時の事を考えてくれている。どうしても『先に逝く』わたしの人生というものを考えてくれている。
そんな優しい先生が大好きだからこそ、先生と一緒に居たいと思う。
――だからこそ。
わたしは、不老不死を目指している。
先生に頼めばきっと、その願いは叶えてくれるだろう。……いや、先生は飽くまでもわたしの自発的な成長に期待しているし、時折不老不死も退屈だと口にする事もある。わたしの事を思って、不老不死の法を施してはくれないかもしれない。

……そんなこの人に寄り添いたいからこそわたしは、自分の力でそれを目指している。
情報を集めるために人の世界で生きる知識を学ぶというのは、無駄にはならないはずだ。
全ては、ずっとずっと、先生と一緒にいるために。
「それではそろそろ帰るか。ここは暑いだろう。今日は修行は休みにするので、涼むといい」
「お心遣い痛み入ります。でも先生さえよろしければ、修行をつけてもらえませんか？わたしにとっては、先生との修行が何よりの楽しみなのです」
「ム……いや、そういう事ならばよい。休憩をはさみ、今日の授業を行うとしよう」
「はい先生！　ありがとうございます！」
こうしてわたしが修行への意欲を表すと、先生は喜んでくれる。それがまた嬉しくて、修行にも身が入ってしまう。
神話に残る伝説の魔法使い。その何人かは、先生の事を指しているという。先生はそれだけ長い時を生きて数多の偉業を残している、偉大な魔術師だ。
わたしは、そんな彼の隣に寄り添いたいと思った。運が良くて拾われただけのわたしだけど、追いつくなんておこがましいけれど、せめて自分の力でその隣を歩きたいと思う。
それがきっと、一番の恩返しになるだろうから。

それがわたしの、アリエッタ＝ペルティアが魔術の道を歩む理由。
先生に連れられて『門』の魔術で屋敷へと帰る。
平凡なわたしの寿命は、きっと魔術を究めるには短すぎるくらい。だから一秒たりと時間を無駄にしないよう、アリエッタ＝ペルティアは邁進するのだ。

第二話　入学試験

「さて――いよいよ明日だな。アリエッタ、準備は済んでいるか？」
「はい、ばっちりです」
夜。食事を終えた私達は、そのままテーブルに残って今後の事を話していた。
アリエッタの用意するレモネードなどを飲みつつ、話題に上るのは、目の前に控えた学園の事だ。
とは言っても、明日からもう入学――というわけでもない。
「重畳。が、今日は少し踏み入った説明をしておこうか。明日、おまえは学園の入学試験を受ける事になっている。それはいいな？」
明日に控えているのは、学園の方の入学試験だ。
アリエッタを学校にやるという事で私は古い知り合いを訪ねたのだが、そこの知り合いに入学試験だけは受けてくれと頼まれたのだ。
今のアリエッタならば魔術関係で通過できぬ試練などないのだが、私自身の付き合いという事もある。ならばどうせなら後ろめたい事はなくしたほうがよいと、正式な手段で入

学させるという事になったのが今回の運びだ。
まあ戸籍やらなんやらの面倒なところはその知り合いに押し付けてきたがともかく。
そもそも学校に通わせるのも己の力を確認させる事が目的だ。合同で受ける試験というのは良い機会である。
頷いたアリエッタを確認して、私は続ける。
「で、今まで話し忘れていたのだが――これから通う学校の事にも触れておこう」
とまあ彼女を学校にやるため、私も私で色々と動いていたのだが、彼女自身があまり興味を示さないという事もあってアリエッタに通う学校の事を話し忘れていた事を思い出した。
「これからお前が通うのはセントコートにある『セントコート中央魔術学園』だ。知っているか？」
「はい。わたしもセントコートに住んでいましたから。名門として有名ですよね」
「私はよく知らんがそうらしい。有名なのか」
私が学校の名を告げると、アリエッタは表情を変えて幾ばくかの興味を示した。
「ええ。確か……三百年以上も昔に設立された由緒正しい学園と聞いています」
よく知らない、と告げた私に、アリエッタは己が知る限りの情報を話し始めた。

――この世界、ユニオールはかつて大きな戦の中にあった。
それも人の世だけではなく、別の次元にある世界、魔界と事を構え天界を巻き込んだ非常に大きな戦乱だ。
百年以上も続いた戦争は『魔王』と呼ばれる存在が封印された事で終結したのだが、しかし魔王はやがて復活すると予言された。それだけではなく人間界には魔界が放った強力な魔物が独自の生態系を築く事で残っており、平和になった世界にも時折大きな被害を出すようになった。
そこで魔物と戦うため、やがて蘇る魔王の脅威に対抗するための技術を持った魔術師を育成する目的で建てられたのが、最初の学園である。
……言われて、思い出した。知り合いが魔界に対抗するための魔術の専門校を作る、と息巻いていた。その最初の学園というのがセントコート中央魔術学園だった気がする。
それまでも教育機関はいくつかあったのだが、住み込みで通う寮生の巨大な学校というのは当時色々と斬新だったはずだ。
「……思い出した。そういえば、設立当初は私も興味を持っていたな」
「おや、知っておられたのですね。当時の学園というのは、どのようなものだったのですか？」

「結局興味を失ったので詳しくは知らん。が、然程は今のものと変わっていなかったはずだ」

言いながら、私はふと昔に思いを馳せていた。当時の『斬新』も三百年も経過すれば『由緒正しき』か。

今では魔法学園の学園長を務める知り合いも、人相が変わっていた。時の流れというのは存外に激しいものだ。

「まあ名門だと言うのならば都合が良い。奴も励んだのだな」

「奴というのは？」

「ああ、古い知り合いだ。そのうち紹介する」

紹介しなくとも学園長という立場上そのうち認識する事になるだろうが、アリエッタが望むのなら面を通しておくのも悪くはない。

話が一段落すると、しばしの沈黙が流れた。

微妙な心地の悪さを感じるのは――なんとなしに、アリエッタの心境を感じていたからだろう。

そしてそれは、私の感じているものと同じだ。

「……ほんとは、寂しいです。先生と離れるのは、初めてですから」

「そうだな」

寂しいのだ。

アリエッタが言った事は私にとっても同じ。アリエッタがいたからこそ楽しかった三年間だ。この三年間は密度が高かったがあっという間だった。

しかしこれから三年間、彼女はいない。その三年間はきっと私の生きてきた千と数百年の間で最も長い三年間になるだろうと感じていた。

「でも、頑張ります。わたしには、目標がありますから」

「それは良い事だ。凝り固まるのも良くないが、目標を定めるのは道なき道に標を持つのと同じ事。私は応援している」

「……はい！」

だがそれでも、これからの三年間が彼女にとって意義のあるものになるだろうと考えていた。

……彼女は、私とは違う普通の人間だ。そのうち、彼女は私とは違う歩調でどこかに行ってしまうのだろう。だからこそ、私は彼女に自分の道の歩き方というのを探ってもらいたいのだ。

「では、今日はもう寝てしまえ。会場までは私が送ってやる。ぬかるなよ」

「わかりました。おやすみなさい、先生」
アリエッタは素直で良い子だ。私にとっては大切な弟子だが、今では優れた弟子である事よりも幸せな人生を歩んでくれる方が重要だ。
そして学園生活というのはきっと、彼女が自分の道を歩む助けとなるだろう。
「ふ……なんとも丸くなったものだ」
自嘲的に笑う。が、悪い気はしなかった。
かつての知り合いが今の私を見たらどう感じるだろうか。
これからアリエッタをやる学園の学園長は――心中であれこれ感じつつ、冷や汗でも垂らしているのだろうなあ。
昔を懐かしむのも程々に、私は椅子から腰を浮かせる。
アリエッタと共にいられる時間もあまりない。ならば自堕落に寝坊する事がないよう、今は早く寝てしまおう。
と、考えたのだが――いや、待てよ。
ふと妙案が浮かんだ。
思い立ったが吉日、というのはアリエッタを迎えた時から痛感している事だ。
早速浮かんだ考えを実行するべく、私は遠見の魔術を発動した。

「……ふむ、いるな」
目当ての場所を見れば、目当ての人物がいる。
これは都合がいい。私は『門』の魔術を発動し、見ている場所とリビングを直接繋げる。
門を潜れば、そこはセントコート中央魔術学園の学園長室だ。
顔をのぞかせてみると――位置が悪かったのだろう、目当ての人物はまだ私に気づいていない。
見れば、酒を飲んでいたようだ。仮にも学校、しかも学園長室で酒を飲んでいるとは不届きだが、此度は私が訪ねる側。最低限の礼儀として挨拶はせねばなるまい。
「邪魔をする」
「おひょおおおおぉぉぉぉっ！　こ、ここここれはテオ殿!?」
と。せっかく人が丁寧に挨拶をしてやっているというのに、酒を飲んでいる老人は槍で尻を突かれたように飛び上がった。
一体人をなんだと思っているのか。
グラスを置いて腰掛けていたソファから立ち上がった老人は直立の体勢だ。突然訪ねて立たせていたのでは申し訳ない。
私は老人の向かいへと座る。

「まったく……来るなら来ると言ってくだされ。老いぼれの心臓を止めるつもりかな」
「思いつきだったのでな。まあ座れガーディフ。話がある」
「思いつきの話とな……わしはもう嫌な予感しかせんのじゃが」
老人の名を呼ぶ事で、ようやく老人は先程まで座っていたソファに腰を下ろした。
豊富なヒゲに長い髪。とんがり帽子という組み合わせはまさしく魔術師と言った風貌。
この男の名前は、ガーディフ＝ゴードリックという。年は確か五百歳と少しだったろうか。
最初に出会ったのは、先程アリエッタが語った戦争の直前――四百年前の『三界戦争』の時だ。その時から何かと目をかけている、私の数少ない知り合いの一人だ。
「嫌な予感しかしないとはご挨拶だな」
「基本、厄介事しか持ち込んできませんからのう……お弟子さんの入学にも結構手を回したんじゃよ、わし」
「それについては感謝している。話というのもそれに関する事だ」
冷や汗を拭きつつも小言で抵抗してくる、というのは私とガーディフとの基本の関係だ。
三界戦争のいざこざで奴は私には頭が上がらんので、色々と利用させてもらっている。代わりに私も奴の願い事を聞いてやっているので、これこそお互いに得する関係というものだろう。

見たまま、私の方が優位の関係ではあるのだが。
「取りやめ、という事ではございませんよな」
そんなわけ無かろう、と私は鼻を鳴らす。
事なかれ主義というか、厄介事を受け入れたくない気持ちでいっぱいなのがよく伝わってくる。
頭が上がらない割に口では反抗してくる、表向き最強の魔術師とされているくせに妙に小物っぽい所が人間臭く、気に入っているのだが。
ガーディフは、この世界で人々に知られる限りは最高の魔術師とされている人物だ。
四百年前の人間界・魔界・天界の『三界戦争』で戦い抜いた英雄であり、やがて蘇る脅威に備える魔法学園の学園長であり、人格者であり――ガーディフの存在は、人々の世では平和の象徴となっている。
が、それでも奴は私には頭が上がらない。それは何故か。
単純に私のほうが永く生きており、強大な魔術師であり――ガーディフが英雄と呼ばれるきっかけになったその『三界戦争』を終わらせたのが、私だからだ。
三界戦争はだいたい百年ほど続いた歴史上最大の戦争だ。人間やら魔族やら天使や神があちこちで戦い続けるのがやかましかったので、いい加減鬱陶しくなった私が魔王を封印

した、というのが三界戦争の結末である。それ以降ガーディフは突然現れて強大な力を見せた私を非常に強く警戒していたのだが、短くはない付き合いの中で利用したりされたりして今に至る――というわけだ。

とはいえ、私の願い事なんて可愛らしいものだ。

かつてこの星に迫る天体をどうにかしてやったりした事に比べれば、弟子を学校に入れろとか、過去に私がやった事の後始末をしろだなんて良心的すぎると言ってもいいだろう。

「当たり前だ。むしろその逆、もう一人余分に試験を受けさせてもらいたい」

なので、少しばかりわがままを聞いてもらう事にする。

先程の私の思いつき。それはアリエッタの他に一人、入学生を増やすという事だった。

「ほ？　お話を聞く限り随分とお弟子さんをかわいがっていたように見えましたが、お弟子さんは二人おったのですかな？」

頼み事は奴の想定よりも軽いものだったのだろうか。

食いつくように身を乗り出したガーディフの顔に安堵が交じる。

過去に私が造った魔術器具を回収しろ、と言った時などはそれはもう愉快な顔をしていたので、そのときに比べればだいぶマシだという声が伝わってくるようだ。

「いいや、弟子はアリエッタだけだ」

「ならば一体？　その子の好敵手になる子でも見つけたのですかな」

問いを否定すると、ガーディフは自らの長い髭をいじり始める。

話を焦らしたり引き伸ばしたりする趣味はないので、単刀直入に言おう。

……が、それでも必要な物がある。私は少しだけ悩んでから、立ち上がった。

「それも違う。その者は――ふむ、そうだな」

そして、私は自らに魔術を掛ける。

視界が縮んでいき、身体は軽くなる。僅かな間でそこに現れたのは、今の私を十年ほど若返らせた様な――というか実際に若返った『少年の姿』だった。

「名前は『テオドール＝フラム』とでもしておくか」

そうしてから、新たに入学生に加える者の名前を告げる。

このくらいになると、ガーディフも新たに加える入学生というのが誰であるか察したのであろう。

長い髭の奥のその顔が、今まで見た事もないような色になった。

「ま、ま、まさか……」

「そうだ。私が入学する。試験くらいは大人しく受けてやるので安心しろ」

「いやじゃあああああッ！　ほれとんでもない厄介事ではございませんか！」

年甲斐もなく、大仰にのけぞり頭を抱えるガーディフ。
年の割に若い反応だとたしなめたくなるが、私に取っては奴も若者。頼み事を聞いてもらう手前、大目に見てやるとする。
「うう……やっぱりテオ殿は凶兆に他ならん……わしの命日は今年中にも訪れるかもしれん……」
「あいも変わらず失礼な奴だな。……いいや、失礼な方ですね、と言ったほうがいいか？」
「やめてくだされ！　気色悪い！　あとが怖い！」
随分と嫌われたものだ。と思いつつも、私は笑っていた。
そう、私の妙案とは――私もまたアリエッタと同じ学園に通う、という事だった。
彼女が求める限り私は師として力を貸すつもりだが、甘やかすつもりは毛頭ない。そのためいつでも側に師匠である『テオ＝イルヴラム』がいる状況は好ましくないのだ。
そこで、私は自らに若返りの魔術をかけて学校に潜入する事にした。目の前のガーディフもそうだが、人間は時の流れで大きく姿を変える。今ここにいる少年『テオドール＝フラム』が『テオ＝イルヴラム』と同一人物だとは夢にも思うまい。
ついでに考えてみれば誰かに師事した経験のない私にとって、生徒という立場はアリエッタの師匠をする上でいい経験となるだろう。

「考え直してくだされ～……わしの学園を壊さんでくれ～……」
「人聞きが悪い。目的はアリエッタを見守る事だ。彼女に私の正体を知られるのは本意ではないし、精々大人しくしておいてやる」
「うう……信じますぞ……どうせわしにはもうそれくらいしか出来ませんでな」
すがるように考えを改めるよう言ってくるガーディフだが、今の私ならなにかを大切に思う気持ちもわかる。
アリエッタの学園生活を邪魔するつもりもないので、そのあたりは利害の一致といったところだろう。
「そういうわけで、枠を用意しておけ。明日試験を受けに来る」
「腹を据えるしかなさそうじゃのう……なんだかんだお世話にはなっておるし、承りましたぞい」
ともあれこれで万事解決だ。
彼女の近くで見守る事が出来るとなれば、私も安心である。結局アリエッタが寂しい思いをするのは変わらないというのは抜け駆けの様で気は進まないが、ここは師として心を鬼にしよう。
「では、邪魔したな。私は帰る」

「なんとも勝手な……帰ってくれるというのなら引き止めはせんが、一つ老いぼれの疑問に答えてはくださらんかな」
「ほう？」
アリエッタと離れずに済む。その事実は思うよりも私の心を弾ませた。
機嫌がいい私は、声にはせずとガーディフに肯定を返した。
「本当に、そのお姿で来られるつもりですかな？」
「アリエッタに正体を隠せればそれでいいからな。学園に通うくらいの年齢に合わせれば、違和感がなくちょうどよいだろう」
何だそんな事かと返答して、私は発生させた『門』を潜る。
「ざ……雑すぎる……まんま本人じゃが、ほんとに大丈夫じゃろうか……」
背後でガーディフの声が聞こえた気がしたが、よく聞こえなかった。
時を巻き戻すなりすれば聞き取れるだろうが――まあ、然程重要な事も言っていないだろう。
そうと決まれば忙しくなるぞ。私は弾む心を抑えて、寝室へと向かった。

◆

そして、入学試験当日がやって来た。

いざ若い者に紛れて試験を受けるというのを考えると、遊び過ぎだと自分をたしなめる心がありつつも、みっともない遊びに興じる不思議な背徳感というものが身を包んでいる。

「私にしてやれるのはここまでだ。空気に飲まれず持てる力を引き出せ。よいな」

が、それは飽くまで副次的なものだ。

本題はアリエッタの入学試験、何よりも優先すべきはそれである。

現在の魔術も昔に比べれば進んだとはいえ、まだまだ私からすれば発展途上もいいところだ。最適にして最効率の私の教えを受けているアリエッタが躓くなど、まずはありえないだろう。

しかし何かの本で試験には魔物が住むという話も見た。要は精神的な問題で実力が出し切れないという話だが――

「大丈夫です。わたしは先生の弟子ですから」

見事な目つき、凛とした態度。素晴らしい。アリエッタには、その心配はないようだった。

気高くも脆いガラス細工の心――そうとばかり思っていたのだが、この三年間で彼女の精神は想像以上に鍛えられたようである。

「ならば行って来い。試験が終わる頃にまた来るので、終わったらこの場で待っていろ」

「はい！　行ってきます」

こうして、私はアリエッタを送り出した。時折振り返っては手を振る仕草が愛らしい。

それもやがて見えなくなるが――私の仕事はまだ終わりではない。

私はふと、辺りを見回す。凄まじい人の多さだ。

当然その殆どは受験しに来た少年少女であるが、中には私のように弟子や我が子の見送りに来た大人達もいる。ちらほらと、私を一瞥する者もいるか。黒いローブは今の社会では随分と古い印象らしい。

……ふむ、このままだと少し目立つな。

私は指を鳴らし、魔術を発動する。

ただでさえ目立つ風貌で指を鳴らせば注目される事請け合いではあるが――途端、注目が薄くなり一歩、二歩と人混みとすれ違う度、視線の数が減っていく。

認識阻害。ここにいる私を意識しづらくする魔術である。三歩も歩けば、私を見る者は誰もいなくなっていた。

四歩も歩く頃には、ここにいる誰もが私のやる事なす事を意識できないだろう。仮に武器を持って暴れまわっても、倒れる死体には気付くが私自身の存在は絶対に感知できない。

人の目を外れた私は衆目の中で若返りの魔術を使う。
少年の姿となった私は学園の中へと足を踏み入れてから、認識阻害の魔術を解除した。
ふと門番が視線を向けてくるが、すれ違う物体を流し見たという、ただそれだけだ。
こうして私は、学生として学園に潜入するというその第一歩を踏みしめたのであった。
「さて……試験会場の教室はどこだったか」
それにしても。歩いてみると、この学園というものは無駄に広い。
これで生徒の数は然程多くはないというのだから、この広さを何に使っている事やら。
案内板と悪戦苦闘しながらなんとか試験会場へたどり着く。
受験番号を見るに、どうやら私はアリエッタの隣で試験を受ける事になるようだ。ガーディフにしては気が利いている。
「……あれ？　ええと……」
何食わぬ顔で隣に座ると、アリエッタが首を傾げている。
最近では減多に見せる事がなかった困惑の表情付きだ。
む、もしや訝しんでいるのだろうか。素晴らしい洞察力と褒めてやりたいところだが……
「失礼、何か用か」

「え？　いえ……知り合いにとてもよく似て？　おられましたので、つい……？」
「ふむまあそういう事もあるだろうな世の中には三人程度は似た人間がいると聞く事だし」
「は、はあ……」
危ない。なんとかやり過ごせたようだ。
まだ釈然としないような顔をしているが、『若返り』の魔術はまだ教えていない。この少年が私自身だというのは考えの外だろう。
「えと、隣になったのもなにかのご縁かもしれませんし、お互い自己紹介をしませんか？　わたしはアリエッタ＝ペルティアと申します」
心中で胸をなでおろしているとアリエッタは一つ咳払いをしてから、柔和な笑顔で名を名乗った。
中々良い社交性だ。人間社会で生きていく上では社交性は重要な能力の一つだという。少なくともここ三年は私と二人きりで暮らしていたというのに、やるではないか。
どれ、ここは一つアリエッタを見習ってみるとしよう。
「テオドール＝フラムだ。よろしく頼む」
「あっ……いえ、よろしくおねがいしますね」

どうだこの名乗りは。敵対的な意識は感じさせず、気安い挨拶までも交えてみる高等技術。

私の挨拶を聞いたアリエッタは何故だか妙に納得したような面持ちで、挨拶を返した。

おそらく挨拶を付け加え忘れていた事に気がついたのだろう。自力でそこに至るとはやはり素晴らしい。

「ところで、一次試験の内容はどのようなものか聞いているか。生憎失念してしまってな、よければ教えてほしい」

「はいせん……はい。どうやら、魔術や世間一般の常識などに対する知識を測る、筆記試験だそうですよ」

「ふむ……一般常識。それは少し苦手な分野だな」

「あはは、それは……やっぱり……」

アリエッタは私の独り言を聞いて戸惑いがちに笑みを浮かべ、何故だか消え入るように語尾を弱くしていった。それは、という後の方は聞こえなかったが、なんと言ったのだろう。人里離れていた場所で暮らしていた故に一般常識に疎い……という心配が、彼女自身にもあるのかもしれないな。

重圧に負ける事なく、実力を発揮できるよう願うばかりである。

その後、私達は試験開始まではまだ時間があるという事で、雑談や情報を交換し合うなどして、親睦を深めた。

……なるほど。学生生活。まだその一端ではあるがこいつはいいものだ。普段弟子として私を慕うアリエッタと、対等な立場で会話する。これは中々新鮮な感覚だった。

「なるほど、魔力凝縮の技術か。ならば今度機会があれば教えるように――」

「お静かに。これより、セントコート中央魔術学園の入学試験を行います。参考書の類は視えぬ場所にしまい、筆記用具を取り出すように」

しばらく雑談を続けていると、この学園の教師だろう、試験の進行役がやって来る。

せっかく会話に花が咲いていたというに、無粋な――と思ったが、元々の目的はこちらだ。

アリエッタと軽く視線を交わして、前を向く。意識を切り替える事としよう。

「よろしい。では試験について説明いたしましょう。試験は一次試験と二次試験の二つ行います。合否は二つの試験の合計点によって決定され、それによって合格後振り分けられるクラスも決定します。手は抜かず、今まで学んだ全てをぶつけるように」

現れた教師は、激励などを交えて説明をすすめる。

その後なされた説明をかいつまむと、やはり先程アリエッタが言っていたように一次試

験は筆記試験で知識を試し、二次試験は実技を試すものだという。

「魔術の力を測るという性質上、不正対策には特に力を入れているので妙な事は考えないように」

また、不正対策には力を入れているとの事だ。なるほど、それは困る。

魔術の知識ならば――進みすぎた理論でバツを食らう事はあっても、合格点程度は取れるだろう。が、社会の一般常識までも混ぜられるとそれも自信がなくなる。

「説明は終わりましたので、試験問題を配ります。まだ伏せておくように。試験時間はいまから五十分です。延期はいかなる場合においても認められません、それでは、始め！」

教師の合図を皮切りに、一斉に受験者達が用紙を表へと返す。

私も彼らに倣い用紙に書かれた内容を見ると――想像通りのものが書き込まれていた。

即ち簡単極まりない魔術の詰問と、私にはわからない社会の一般常識だ。

さて、どうするか。ちらりとアリエッタに視線を向ければ、淀みなくペンを動かしている。

私はどうするか。……まあ、不正をするのだが。

方法はいくらでもある。例えばあらゆる情報が収蔵されている世界の真理に接続しての自動筆記とか、未来視による解答の確認やら。

が、今回私が選んだのは、極々普通のカンニングだった。指定の箇所に視界を作成し、操る『魔術師の眼』という魔術――所謂千里眼というやつだ。

当然この手のシンプルな魔術は対策されている。どうやら試験会場全体に十重二十重の感知結界が張ってあるようだったが――この程度の結界から魔術を隠匿する事など容易い。

「（あの生徒にするか）」

私はペンの動きに伴って金髪を揺らす一人の少女に目をつけた。

軽やかにペンを動かしている、おそらくは迷う事もなく書き進めているのだろう。その解答用紙を覗き見れば、魔術の方はほぼ全問正解だった。一部の理論は私にとっては、古く非効率なものがあったが、それは現在のこの社会では正解なのだろう。

この分ならば一般常識の方も期待できそうである。遠慮なく、解答を拝借するとしよう。

こうして私は五十分の試験に対し、その半分以下の時間でペンを置く。

余った時間でアリエッタの解答を覗き見て答え合わせをしてみたが、なんとこれが表記の揺れ以外は完全に一致。これは結果の方にも期待ができる。流石は我が弟子だと満足気に頷いて、私は一次試験を終えるのだった。

◆

「テオさん、試験の方はどうでしたか？」
「そこそこと言ったところだ。その分ではお前の方も良かったようだな」
「ふふ、はい。先生が良かったので」
一次試験を終え、僅かな休憩時間を挟み、私達は受験者の列を成して歩いていた。
ここからは試験会場を外に移し、実技の検査に入るようだ。
こちらはカンニングなどする必要も無い。教師の魔力を視るに、私は勿論アリエッタが達成できぬ内容は出ないだろう。
周りの空気はぴりぴりしているが、私とアリエッタは気楽なものだ。特に私は一次試験をほぼ満点で正解しただろうという確信があるので、満点が確定しているであろう実技を前にすればもう消化試合もいいところである。
「皆さん揃っているようですね。ではこれより二次試験を開始します」
やがてたどり着いたのは、広い校庭であった。
私達の前には魔石の珠と、結界が用意されている。
これを見て、私はすぐに二次試験の内容に気がついた。まあこれを見れば、多くの者は察しが付くだろうが――
「二次試験は、この結界の中にある魔石を一回の魔術で破壊するというものです。結界は

非常に強力です。絶対に、外へ影響は及ぼしません。持てるだけの力を全て解き放つように」
案の定、試験は魔法の威力を検査するものだった。なるほどシンプルで良い。あえて小難しい注文を付けない事で応用力も同時に見るというのは、私が最初にアリエッタに課した試練と通じるものがあるな。
「しかしその前に一つだけ、お伝えしておく事があります」
ただしこれは――それよりも大分意地が悪いが。
試験の内容を考えているのはあの老いぼれか。虫も殺さぬような面をしていてよくやる。
教師の声に困惑する受験者達。彼らをよそに、案内役の教師は右腕を掲げた。
「『コロナボム』――」
呪文の発句と同時に、掲げられた右手の上に巨大な火球が膨れ上がる。
流石に世界一の名門校と呼ばれる場所の教師だけあり、中々の規模の魔術だ。
「こ、こんな所で何を……！」
「ちょっ……これ危ないんじゃ!?」
その強大さに、受験者達にざわめきが広がる。
だが教師は気にした風もなく、腕を振るい、火球を結界へと投げつける。

結界への着弾、その直後――気の抜けるような、小規模な破裂音と、見掛け倒しもいいところの小さな爆炎。

「この様に、結界は非常に強力にできています。周囲への影響は気にせずに、試験に臨んでください」

どうやら結界の強度を実演したかったらしい。

しれっと言ってのける教師。辺り一帯を包み込むような爆発を予想していた受験者達は胸をなでおろした。

が、その反面、眉を顰める受験者達も居た。見れば、アリエッタも苦い顔をしている。

……よろしい。この試験の違和感に気が付いているようだ。

「では一番！　アダム＝エイサル、結界の中へ！」

生徒達の顔に緊張が浮かぶ中、一番の少年が呼ばれる。

アダムと呼ばれた少年の顔は緊張で錆びついているかのようになっている。

まったく気の毒な事だ。

「制限時間は三分間、始め！」

教師が制限時間を口にすると、私は口角を釣り上げる。

やはり。そう口の中で転がす。一番槍の結果は、既に見えた。

「おおおおおッ！　ライトニングボルト！」

少年が放った魔術は、雷の魔術。雷で敵を打つ殺傷能力の高い魔術だ。

一本の雷は正確に魔石を撃つ――が、びくともしない。傷一つ無い。

結果は、今ひとつと言ったところだろう。ライトニングボルトは戦闘においては優秀な魔術だが、それは発動の速さと命中率、殺傷能力のバランスの良さが大きい比重を持つ。より威力を重視したものを選択するべきだったな。

「く、くそっ……！」

「それまで。では次の者、アリエッタ＝ペルティア！」

涙を浮かべて結界を去る少年に代わって呼ばれたのは、アリエッタだった。

なんと、早速出番か。これはいい、と私は笑みを浮かべた。

名前を呼ばれたアリエッタは一つ息を吸ってから、私を見る。

「頑張ってこい」

「……はいっ！」

その視線に激励で応えると、アリエッタは力いっぱいに頷いた。

やはりアリエッタは薄々この試験の意地の悪さに気がついているようだ。

結界へ足を踏み入れたアリエッタは、静かに集中している。

教師の視線の色が変わった。『気が付いている事』に気が付いたのだろう。
「始めなさい！」
そうして試験は開始された。
今のところは十点満点。さて、ではアリエッタの魔術の選択は――
「ククッ、それでいい」
やはり、彼女は素晴らしい。迷わずにアリエッタが選択したのは、彼女が最も得意とする火属性の魔術ではなく――土属性の魔術であった。
黄土色の魔力が漲り、掲げられたアリエッタの右腕に収束していく。
時間を使い、練り上げられる魔力。魔力というのは『練る』事でその質を上げる。が、それは一般的にはそれなりに高等技術だ。練って強力になった魔力を更に練り上げる事は特に難しい。紙を折り曲げる事を考えるとイメージしやすいだろうか？　折り重ねるほどに紙は力に対して硬く強くなり、曲げるための力は増える。
この場にはそれなりに優秀な者もいるが、それらでもせいぜい一分間練り上げ続ければ上出来と言ったところだろう。が、アリエッタはそれを三分間時間いっぱいにやってみせた。
「『ロックグレイブ』！」

収束し、密度を高めた魔力を、土の岩槍に変換して放つ魔術、ロックグレイブ。
それはやはり彼女が出来うる中で最良の選択だった。
理由は三つ。単純に威力が高い魔術を選んだ事、収束した密度の高い魔力は一点に破壊力を集中できるという事、そして――物理に近い攻撃特性を持つ事だ。
何人かは気が付いているようだが、この魔石は対魔力に特化しており、わずかにだが物理への耐性が低い。土属性の魔術は唯一の最適解なのだ。
私の試験と同じく、これもまた応用力を高く評価する試験という事だ。
だが、それだけでは意地が悪いとは言えない。
アリエッタの放った魔術は、魔石へと突き立った。が、完全な破壊には至らない。
「ま……まさか……学園長の造った魔石に傷をつけるとは……！」
アリエッタに注目が集まる中、教師が小声で呟いた事を、私は聞き逃さなかった。
そう、この試験の意地が悪い理由。それは学生程度では破壊するどころか傷一つ付けられないくらいにこの魔石の防御力が高いという事である。それはおそらくは全力を出させるための方便。だが『破壊しろ』という注文は――なんとも意地が悪い。
その点で言えばアリエッタは満点を超えた超満点と言ったところだろう。この結果は、ガーディフでさえ驚くもののはずだ。キャリア五百年のベテランである魔術師の珠玉の防

御魔法を、たった十五歳の少女が貫いたというのはな。
「くっ……！」
アリエッタはそれでも、悔しそうに歯噛みしてみせる。あの魔石の強度には気が付いていたはずだが、その上で完全に破壊してみせるつもりだったのだろう。
教師に促されて結界をあとにするアリエッタを、私は笑みで迎え入れる。
「やるじゃあないか」
「……そんな。破壊できませんでしたから。これでは先生に合わせる顔がありません……」
そう言って、アリエッタは顔を俯かせてしまった。
……ふん。気に食わん。全力を出す名目とはいえ、達成不可能な課題を押し付けるというのは、教育者として如何なものだ。ええ？　ガーディフ。
「気にするな。最良の選択と、見事な魔術だった。少なくとも私は高く評価する。お前の先生とやらも、満足行く魔術だったろう」
「……！　もったいないお言葉です」
称賛を固辞するような言葉ではあるが、その表情には喜びが差していた。
うむ、うむ。ここまでした愛弟子を叱る師などおるまいて。

やはりここに来て正解だった。弟子の成長を目の当たりにするのは良いものだ。
その後も、試験は継続する。
時折目を見張る受験者もいる。が――
「なんて防御力ですの……！」
破壊には、やはり至らない。
悪態を吐いたのは、気の強そうな金髪の少女だった。
この娘は先程私が答えを拝借した解答用紙の持ち主だったはず。
中々面白い。文武ともに優れるというわけだ。
実力によるクラス分けは、おそらく最高のものに振り分けられるだろう。即ち、私やアリエッタのクラスメイトとなるであろう少女の顔を、そっと覚えておく。
しかし――魔石の予備を用意していたのは流石ガーディフといったところか。
今校庭に設置されている魔石は、私が魔石を破壊したあとも試験を続行するためのものだったはずだ。
こんな事をせずとも意を組んで加減してやっても良かったのだが――少し、意地悪をしてやりたい気分になった。
「次！　テオドール＝フラム！」

私の名前が呼ばれる。
思わず聞き流すところだったが、私は余裕たっぷりに結界へ足を踏み入れた。
「学園長の言っていた『厄介な子供』は貴方ですね。どんな事情があるかは知りませんが、私は試験の結果は優遇いたしませんよ。それだけ伝えておきます」
どうやら、それとなく私の存在は伝えられているらしい。
小声で伝えられたのはそれと無い敵意だ。多分、裏口入学する生徒がいるとでも伝えているのだろう。
奴なりの意趣返しのつもりなのだろうか。私は愚かなので、存分に乗ってやろう。
「始め！」
合図とともに結界内から教師が退避するのを確認し、私は右手に魔力を込めた。
ふむ。この硬さならば、これくらいか。
私が試験にあたって選ぶ魔法は――アリエッタの真逆を行くものであった。
即ち一点突破ではない広範囲への魔術であり、タメは少ない無加工の魔力であり、そして物理的な威力のない純魔術。要するに、この試験に対する最悪の選択だ。
教師が鼻を鳴らすのが見えた。私は口角を歪めて、魔力を解き放つ。
「インフェルノ」

その名を告げ、拳を握り込む。
すると私を中心に炎の嵐がドーム一杯に広がっていく。
荒れ狂う火炎はその勢いのままに膨張し――硝子が砕けるような激しい破砕音。
ガーディフが魔石以上に力を込めて作った結界を、打ち壊した。
「あ……な……バカな、結界ごと……！」
硝子の膜が剝がれ落ちるように崩壊していく結界を見つめ、教師が驚愕する。
当然だろう。全力の魔術を扱わせる危険性から、結界の外部を守るための魔術だ。流れ弾などを考えて、魔石よりも結界をより強固なものにするのは当然の事。
私はそれを打ち破ってみせたのだから。
当然、そんなものをぶつけたのだから中の魔石も完全に破壊されている。
静けさの中、ガーディフが放った『魔術師の眼』をみやり、私は嗤ってみせた。
何も言わずに待機列に戻ると、憧れの目で私を見るアリエッタを見つける。笑みの種類を変えて、私は彼女に微笑んだのだった。

続きは、2月20日発売のファンタジア文庫で！

©Kakkaku Akashi, Mitsuki Yano 2020